

---

# 三剣士の雑談劇場

river

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三剣士の雑談劇場

### 【Nコード】

N9617M

### 【作者名】

river

### 【あらすじ】

オリジナルキャラ「三剣士」が、テーマに「なるべく」沿ってただただ駄弁る、もしくはゲストを呼んで駄弁る、たまに戦う、ただそれだけの作品です。（タイトルから「出張版」取っ払いました。もうこっちを本拠地にします。）

## 第一回

高史

「どうも、知ってる人は知っている、川口高史です。」

剣汰

「その兄（義理）、川口剣汰だ。」

春花

「剣汰の妹で婚約者の、桜井春花です。」

剣汰

「三人そろって……」

高史？ 剣汰？ 春花

「「「三剣士見参！！」」」

高史

「というわけです。いにはじまりました、三剣士の雑談劇場出張版！」

剣汰

「この作品は、俺たち三剣士がテーマに「なるべく」沿ってただただだべるだけの、正直「小説じゃないじゃん」と言われても文句が言えない作品だ。」

春花

「ちなみに、なぜ出張版かというと、実はこの作品は元々「オンライ初音島」というところで作っていたのですが、ここで連載ものやりたいと思っていた作者が「よし、これやっちまおう」ということで、ここで出張版として始まったわけです。」

はい、説明ご苦労さん。

高史

「つーかあんたが説明しろや!!」

ちなみにこの出張版では、この俺作者が雑談にたまに加わります。  
ではさっそく、今回のテーマの発表ですよっと。

高史

「今回のテーマは、「キャラ紹介」ってやっぱりか!!」

むしろ当然。

高史

「じゃあ俺から。」

「初投稿でキャラ紹介…」参照。

以上。」

剣汰？春花

「早っ!!」

高史

「んじゃ次、剣汰兄ちゃんね。」

剣汰

「…俺は川口剣汰。」

最初に行ったとおり、高史の義理の兄だ。

年齢は25。

ちなみにゴッドリュウケンダーに変身できる。

武器はゴッドゲキリュウケンと豪竜胆と武雷の小手だ。」

高史

「武器まで言う必要あった？」

剣汰

「知るか。」

春花

「次は私ね。」

私は桜井春花。

あとは最初に行ったとおり。

あと、リュウジンオーと仮面ライダーラルクに変身できます。

年齢は…」

高史

「19。」

春花

「なんであなたが言うのよ！」

高史

「いや、女子は歳隠したがるから…」

春花

「あんだだっで女でしょ！」

高史

「残念俺は「男女」だ!!」

剣汰

「威張って言うことか。」（ハリセン攻撃）

スパーン！

高史

「ぐばっ!？」

春花

「全員の紹介終わったけど、どうするの?」

あー、じゃあこの作品の追加説明お願い。

春花

「わかった。」

「三剣士の雑談劇場 出張版」では、私たちと一緒にだべってく

れるゲストを募集しています。」

剣汰

「リクエストは基本的に必ず実行する。

ただし、作者がその作品（この小説）を見たことない場合は見  
てから招待するが、作者が挫折して断念する場合もあるので、ご了承  
承してくれ。」

次回とその次のテーマは決まってるんで、招待は第四回からになり  
ます。

それでも、と言う方はご応募ください。

また、感想には必ずお返事をするので、よろしくお願いします。

高史

「では、今回はこの辺で閉店です。」

剣汰

「店じゃないだろ。」

春花

「それでは皆さん！」

剣汰

「次回もお楽しみに。」

高史

「バイバイキーン」

剣汰

「初回でそれかよ……」

## 第一回（後書き）

「三剣士たちを出演させたい」というのも受け付けてますので、お気軽にご連絡ください。  
基本的に拒否はしないので、お

## 第二回

高史

「さあ始まりました、三剣士の雑談劇場出張版！  
司会の川口高史です！」

（ワーワー パチパチパチパチ）

剣汰

「同じく、川口剣汰だ。」

（ワーワー パチパチパチパチ）

春花

「同じく、桜井春花です。」

（ワーワー パチパチパチパチ）

そしてどうも、作者です。

春花

「それで、今回のテーマは？」

高史

「今回はその前に…なんともうゲストが来てくれました!!」  
剣汰？春花

「「おー！」」

剣汰

「ってちょっと待て。」

招待は第四回からじゃなかったのか？」

いやそれが、今回のテーマがゲストの二人にうってつけだったもんだから、呼んじった

高史

「そういつわけで、さっそく紹介しましょう、今回のゲストは、

「魔法少女リリカルなのはStrikerS & HEROES」  
より、

風上光さんと風上フェイト？テストロツサさんです！どうぞー！

チャーチャツチャツチャーチャー      チャーン

光？フェイト

「「こんにちはー」」

春花

「「よっこそ、三剣士の雑談劇場へ！」

剣汰

「「なんでBGMが「テレオンショキング」なんだよ……」

高史

「仕様」

フェイト

「「やっぱりおもしろい」

光

「「そうですね。」

では、光フェイトが来てくださったところで、今回のテーマ行きますか。  
はいこれ。

（高史にカンペを手渡す。）

剣汰

「本番中にカンペ渡すな。」

高史

「えーっと…なるほど、そういうことか。」

春花

「どういうこと?」

高史

「今回のテーマは、「日本三大特撮劇場版その1」です!」

(ワーワー パチパチパチパチパチ)

春花

「その1ってことは…」

高史

「ああ、一つずつ紹介していくみたい。」

光

「それで、今回紹介するのは?」

高史

「今回紹介するのは…」

「仮面ライダーダブルFOREVER AtOZ/運命のガイア

メモリ」です!」

光?フェイト

「なるほど。」

( 光とフェイトは、仮面ライダーダブルに変身可能。 )

高史

「そろそろみなさんご存知のはず、仮面ライダーダブルの劇場版! ちなみに、まだ公開してないのにTV本編はもう映画の事件解決

後とはこりゃいかに。」

剣汰

「確かに。」

光

「定番の劇場版ライダーは、「仮面ライダーエターナル」でしたね。」

「

フェイト

「確か、旧型のガイアメモリをすべて無力化しちゃうんだよね。」

春花

「それによつて、ダブルが変身できなくなる、つて…」

高史

「まあ、当然といえば当然な流れだな。」

剣汰

「しかもエターナルの配下は、ダブルと同じ種類のT2ガイアメモリで変身するドーパントだったな。」

高史

「ダブルのメモリでドーパントになるとどうなるのか…ダブルファンなら一度は思ったはず！」

光

「サイクロン、ヒート、メタル、ルナ、トリガー…能力が能力なだけに、どれも強敵ですね。」

春花

「あれ？ジョーカーは？」

フェイト

「ジョーカーのT2ガイアメモリは、翔太郎が手に入れて、「仮面ライダージョーカー」に変身するんだよ。」

春花

「なるほどー」

光

「そつといえば、サイクロン？ドーパントは味方らしいですね。」

亜樹子さんをトリガー？ドーパントから助けるそうですが…」

高史

「フーかき、サイクロンって絶対…」

全員

「……フィリップだよな（ね）。」「……」

春花

「しかも最近、サイクロンジョーカーエクストリームが金色になる、  
って噂が…」

高史

「次から次へと…」

フェイト

「そういえば、またやるみたいだね、次回作のライダーとの共演！」

高史

「デイケイドのせいで周期がずれたからなあ…」

光

「確か、「仮面ライダーオーズ」でしたね。

噂によると、フォーム数はダブルを上回るとか…」

春花

「どんだけー」（某オカマではなく、某双子巫女の妹風に）

とりあえず、まとめると…

全員

「……期待大!!」「……」

高史

「さて、そろそろ閉幕の時間が近づいてきましたが、光さん、フェイトさん、どうでしたか？」

光？フェイト

「もちろん楽しかったです!」「」

春花

「ありがとうございます」

高史

「お二人は、「Strikers&amp;HEROS」のバカッ  
プル夫婦の中で、唯一の子持ちなんですよね。」

光

「はい、光牙も奈美も、元気に育っていますよ。」

剣汰

「光牙の方は、もう主人公やってるしな。」

高史

「風上一家に、神のご加護がありますように……」

光

「そういえば、何かのネタなんですか、それ？」

フェイト

「翔とアリシアの結婚式の後にも言ってたけど……」

高史

「ああこれ、「怪盗 세인트テール」って漫画のネタなんだけど……」

さすがに知らんでしょう、なんせ作者が生まれた頃にやってた漫画ですからな。」

光

「そんなのをなぜ……」

ダンボールに入った日本史漫画に、セーラームーンと共に一巻だけ混じってて、呼んでみたらはまりました。

フェイト

「セーラームーンに混じってたってことは……」

うん、少女漫画。

ちなみにアニメ化もしてて、レンタルビデオで全話見ました。

剣汰

「つーか終わり近いっつってんのにいつまで話してるんだよ。」

高史

「まあまあ。」

あと、次回の「Strikers & amp; HEROES」(第三

十話)に、俺と剣汰兄ちゃんが出演するんで、そちらもよろしく!

春花

「光さん、フェイトさん、本当にありがとうございました!」

光?フェイト

「「いえいえ、こちらこそ」」

高史

「それでは、このへんで。」

剣汰?春花

「「次回もお楽しみに!」」

高史

「See you, againですー」

剣汰

「英語はちゃんとしたか…」

## 第二回（後書き）

Wiiで書くのは正直しんどい…

デイワールドさん、リクエストありがとうございました！

デイワールドさんの「魔法少女リリカルなのはStrikers & amp; HEROES」もよろしく願いします！

なお、この作品はユーザー以外の方も感想を書き込めるようにしてありますが、こちらで「迷惑だ」と判断したものは容赦なくデリート（削除）するので、ご了承ください。

「魔法少女リリカルなのはStrikers & amp; HEROES」は削除されました。

### 第三回

剣汰

「さて、今回も始まったぞ」「三剣士の雑談劇場 出張版」  
司会の川口剣汰だ。」

カイザ

「同じく、仮面ライダーカイザです。」

ラルク

「同じく、仮面ライダーラルクです」

剣汰

「ちよつと待て、何でお前らだけ変身してるんだよ!?!」

カイザ

「いやだって、剣汰兄ちゃん仮面ライダーないじゃん。」

剣汰

「考える作者!」

無理。

だって剣汰創った(考えた)の、うちの弟だもん。

剣汰?カイザ?ラルク

「「「あー……」」」

つーことで、剣汰何にする?弟よ。

作者弟

「カリス。」

もちろんワールドになれる。」

剣汰?カイザ?ラルク

「「「居たんかい!!」」」

（うちの弟はカリスが一番好き。）

作者弟

「はいこれ。」

（剣汰にカリスラウザーとラウズカードを手渡す。

剣汰、早速装着。）

剣汰

「変身。」

「チェンジ エボリューション」

（剣汰、カリスに変身し、そのままワイルドカリスに変身。）

ワイルドカリス

「これでよし。」

カイザ

「ちやつかり三人の中で唯一強化形態…」

サンキュー弟。

作者弟

「じゃあなバカ兄。」

んだとコラア！

（作者弟退場）

ワイルドカリス

「さて、揃ったところで、ゲストの紹介といくか。」

カイザ

「また来てんの!？」

うん。

当初の予定をぶっ飛ばして呼びました。

ワイルドカリス

「それでは紹介しよう、今回のゲストは、

「仮面ライダー電王LYRICAL」より、仮面ライダー電王と野上良太郎と、フェイト? テスタロツサだ、どうぞ。」

(お馴染みの音楽と共に、デンライナー登場。)

ワイルドカリス? カイザ? ラルク

「『デンライナー来た!?!?!』」

(デンライナーが停車し、扉が開き、電王ライナーフォームとフェイト(バリアジャケット姿)登場。)

電王? フェイト

「『こんにちはー。』」

ラルク

「ようこそ、三剣士の雑談劇場へ!」

カイザ

「あー、だから変身してたわけか。」

ワイルドカリス

「知らなかったのかよ!?!」

ごめん、黙ってた。

ってことで、今回は「電王LYRICAL」本編に先立って、ライナーフォームに変身してきていただきました！

電王

「でも、これじゃ顔が見えないよ。」

それもそうだねー

じゃ、フェイト以外変身解除で。

フェイト

「何で私だけ!?!」

冗談冗談。

フェイトも解除していいよ。

フェイト

「びっくりしたー…」

(全員、変身解除。)

高史

「これでまともに雑談できますな。」

良太郎

「まともにする雑談って…」

剣汰

「気にしたら負けだ、多分。」

はいこれ今回のテーマ。

( 剣汰にカンペを手渡す。 )

剣汰

「どれ…ふむ。」

今回のテーマは、「仮面ライダー電王をLYRICAL含めて語るう！」だ。」

( ワーワー パチパチパチパチ )

高史

「仮面ライダー電王は、そろそろ知らない人はいないであろう8番組の平成ライダーです。」

TV本編の視聴率はあまりよくなかったらしいけど、映画は今までで全七作、そのうち三作は連続公開と、かなりの人気の高さがかがえる作品です。」

春花

「ほとんどキャストと世界観を一新された「ディケイド」でも、電王は良太郎以外原作オリジナルキャストだったし、世界観も原作そのままだったもんね。」

剣汰

「まあ、響鬼とBLACKおよびRXも一部オリジナルキャストだったか。」

フェイト

「どうして良太郎はオリジナルじゃなかったの？」

剣汰

「大人の事情だろう。」

高史

「電王のフォームは全部で八つ。まずは基本、ソードフォーム。」

(そのとき、良太郎にモモタロスが入り、デンオウベルトを出し、赤いボタンを押す。)

M良太郎

「変身！」

「ソードフォーム」

電王ソードフォーム

「俺、参上！」

春花

「変身しちゃったー!？」

剣汰

「ソードフォームは、その名の通り剣を使うフォームだ。

必殺技は「俺の必殺技」こと「エクストリームスラッシュ」だ。」

フェイト

「確かその技って、たくさん種類があるんだよね。」

剣汰

「最初にでたのがPart2、その後も複数種類がでて、中には「Part2と見せかけてストレートと真ん中」なんてのもあったな。もちろんPart1もちゃんと存在する。」

使用するデンライナーはゴウカ。

武装はゴウカノン、ドギランチャー、モンキーボマー、バーデ  
イミサイルの四つだ。」

高史

「続いて第二のフォーム、ロッドフォーム。」

(電王にウラタロスが入り、モモタロスが追い出された。

U良太郎、デンオウベルトの青いボタンを押し、パスをセタッチ。

「ロッドフォーム」

電王ロッドフォーム

「お前、僕に釣られてみる？」

剣汰

「ロッドフォームは、ロッドを使うフォーム。

ロッドは、釣り竿にもなる。

必殺技は、「ソリッドアタック」からの「デンライダーキック」だ。」

高史

「二つ目にしてようやく定番だな。」

フェイト

「定番？」

春花

「主役ライダーの必殺技は、ほとんどがキックなんだよ。」

例外は響鬼。

剣汰

「使用するデンライナーはイスルギ。 武装は車体後部に搭載されたレドームだ。」

高史

「続いて、第三のフォーム、アックスフォーム。」

（電王にキンタロスが入り、ウラタロスが追い出される。

K良太郎、デンオウベルトの黄色のボタンを押し、パスをセタツチ。）

「アックスフォーム」

電王アックスフォーム

「俺の強さにお前が泣いた！

涙はこれで拭いとけ。」

剣汰

「アックスフォームは斧を使うフォーム。

必殺技は「ダイナミックチョップ」で、敵に命中して爆発した後  
に技名をいうのが特徴だ。」

フェイト

「なんで後から言うの？」

春花

「なんでだろう…？」

高史

「そういうキャラなんだろ。」

剣汰

「使用するデンライナーはレッコウ。

武装はフロントアックスとサイドアックスだ。」

高史

「続いて第四のフォーム、ガンフォーム。」

（電王にリュウタロスが入り、キンタロスが追い出される。

R 良太郎、紫のボタンを押して、パスをセタツチ。）

「ガンフォーム」

電王ガンフォーム

「お前、倒すけどいいよね？

答えは聞いてない！」

剣汰

「ガンフォームは、銃を使うフォームだ。  
必殺技は「ワイルドショット」。」

高史

「はた迷惑だが、四フォーム中では多分最強のフォームだな。」

剣汰

「使用するデンライナーは、イカツチ、レッコウ、イスルギ、ゴウ  
力。」

合計九両のデンライナーを操り戦う。」

高史

「続いて第五のフォームがウイングフォーム、第六のフォームがク  
ライマックスフォーム、第七のフォームがさつき出たライナーフォ  
ーム、そして第八のフォームが超クライマックスフォームだ。」

さて、ネタ尽きたし、LYRICALの紹介行きますか。」

「仮面ライダー電王LYRICAL」は、皆大好きさんが書いている  
小説で、良太郎がジュエルシードをオーナーから受け取り、「リ  
リカルなのは（無印）の世界」に来て、フェイトと出会い、ジュエ  
ルシード集めを手伝う、といった作品です。」

なお、モモタロスを始めとする電王側イマジンなのは側につい  
ています。」

剣汰

「無印をベースにしている、主人公がフェイト側についているのは、  
どちらかかというところ珍しいと思うぞ。」

フェイト

「そうなんですか？」

高史

「まあ、「リリカルなのは」は名の通り、主人公なのはだからな。」

剣汰

「今は、良太郎がプレシアが言っていた「真実」を知るために、フ  
ェイトにかざして入手した三枚のチケットを使って、デンライナー  
で過去を巡り、ちょうど帰ってきたところだったな。」

良太郎

「はい。」

春花

「それで、「真実」って何のことか、わかったんですか？」

良太郎

「はい、ここでは言えませんが。」

剣汰

「それで、これからどうする？」

良太郎

「フェイトちゃんの世界の「時の運行」を守ります。」

プレシアさんのために、そしてなにより、フェイトちゃんの為に

も。」

フェイト

「良太郎… / / /」

剣汰

「そうか。」

春花

「頑張ってください、応援してますから！」

良太郎

「ありがとうございます。」

剣汰

「さて、そろそろ閉幕の時間が近づいてきたな。」

良太郎、フェイト、どうだった？」

良太郎？フェイト

「もちろん、楽しかったです！」

春花

「ありがとうございます。」

高史

「そっいや、たしか近々また離れ離れになるらしいですな、良太郎

とフェイト。」

良太郎

「はい、だから僕らの作者さんに、ここで楽しんでくるように、といわれました。」

剣汰

「…お前たち二人なら、たとえまた離れ離れになっても、必ずまた一緒になれる。」

だから、フェイトは良太郎を信じている。」

フェイト

「はい！」

剣汰

「良太郎、もしもの時は、俺たちが可能な限り力を貸そう。」

良太郎

「ありがとうございます。」

春花

「あまり無理はしないでくださいね。」

高史

「死ぬこたないだろうが、怪我したらフェイトが悲しむからな。」

良太郎

「はい、わかってます。」

高史

「ならよし！頑張れ！」

良太郎

「はい！」

じゃあ、今日の締めはこれね。

(全員にカンペを手渡す。)

剣汰

「ふむ…まあいいか。  
作者除けば人数合うしな。」

ひどっ。

フェイト

「私たちもこれをやるの？」

高史

「そうなるな。」

フェイト

「一緒にやってくれる？良太郎。」

良太郎

「もちろんだよ、フェイトちゃん。」

剣汰

「みんな、準備はいいか？」

フェイト

「はい！」

良太郎

「行けます！」

高史

「All right！」

春花

「オツケー！」

剣汰

「よし、じゃあいくぞ。」

本日の雑談劇場、

全員

「『終了！』」「『』」「『』」

### 第三回（後書き）

やっぱりWiiで書くのは面倒くさくてしんどい…  
でも手段がこれしかない…

皆大好きさん、リクエストありがとうございます！  
皆大好きさんの「仮面ライダー電王LYRICAL」も、よろしくお  
願いします！

## 第四回という名の番外編（前書き）

今回は番外編です。

でも、サブタイトルの回数と総話数の数字を合わせたいので、第四回です。

## 第四回という名の番外編

剣汰

「…なぜ俺だけここにいる？」

よっ、剣汰。

剣汰

「作者か。」

高史と春花はどうした？」

お呼びじゃないよ。

だって今回は「第四回という名の番外編」だから。

剣汰

「番外編？」

「どっこういうことだ？」

すぐにわかるぞ。

カモン、弟！

作者弟

「ちやつす。」

剣汰

「お前は…俺の創造主…」

作者弟

「はいこれ。」

（剣汰に何かを手渡す。）

剣汰

「これは…ロストドライバー…？」

作者弟

「それとこれ。」

( 剣汰に一本のメモリを手渡す。 )

剣汰

「これは…ガイアメモリ…？」

作者弟

「それは「ライダーメモリ」。

剣汰の変身アイテム。」

剣汰

「これが？」

作者弟

「そう。」

剣汰はそのメモリで、気分次第で様々なライダーに変身する。

ダブルのメモリも使えるぞ、片方だけだけど。」

剣汰

「それってつまり……」

作者弟

「「仮面ライダージョーカー」とか、「仮面ライダーサイクロン」

とかになる。

あと、カリスとか何か必要なものがあるやつは、メモリ自体が変身

するから。」

剣汰

「なるほど…ん？」

これ、ディケイドとディエンドとダブルとカイザとラルクがないぞ？」

作者弟

「ディケイドとディエンドはカードがないから、ダブルはメモリが一本だけだから、カイザとラルクは高史と春花が変身してるから変身できない。」

剣汰

「なるほどな。」

用事は以上だ。

お疲れ剣汰。

剣汰

「疲れるようなことしてないがな。」

じゃ、今回はこれで終わり。

作者弟

「次回もお楽しみに。」

じゃあなバカ兄。」

んだとコラア！

#### 第四回という名の番外編（後書き）

今日弟に「剣汰って何に変身するの?」って聞いたら、上のように言っていたので急遽書きました。

## 第五回（前書き）

最初に言っておく！

今回の高史と剣汰は、まだ「バトル学園物語」の第二話を見ていない！

…ネタバレささりましたが、どうぞ。

## 第五回

高史

「さあさあ始まりました三剣士の雑談劇場出張版！

司会の川口高史です！」

剣汰

「同じく、川口剣汰だ。」

春花

「同じく、桜井春花です」

高史

「今回は、なんとまたしてもゲストが来てくれてるぞー！」

(ワーワー パチパチパチパチパチ)

剣汰

「拍手の回数が一回増えたな。」

高史

「さすが剣汰兄ちゃん、鋭い！」

それでは紹介しましょう、今回のゲストは、

「バトル学園物語」より、荒神サクヤさんと、早乙女明菜さんと、

中澤真：さんです、どうぞ！」

真

「うおい！なんだよ今の間は！？」

高史

「いやー：さん付けすべきか否か一瞬迷ってもうた。」

真

「迷うなよー！」

剣汰？春花

「ムリだな。」

高史

「春花どころか剣汰兄ちゃんまでネタで返すなんて…相当嫌われてるぞ、お前。」

真

「くっ…こうなったら、春花さんのむ「千鳥!」「ぎゃああああああああ!」」

(真に剣汰の千鳥炸裂。)

剣汰

「…警告はしたはずだ。」

高史

「こういうのに警告は無意味だよ。」

おっと、サクヤさんと明菜さん、どうぞこちらへ。」

サクヤ

「…こんにちは…荒神…サクヤです…」

明菜

「サクヤの幼なじみの、早乙女明菜です。」

春花

「ようこそ、三剣士の雑談劇場へ!」

サクヤ

「…ありがとうございます…」

春花

「さてと、今回のテーマは何なの?」

剣汰

「そういえば、今回作者いないな…」

高史

「メモモといカンペ預かってるよ。」

(剣汰にカンペを手渡す。)

剣汰

「なんでいちいちカンペ扱いなんだ…？」

高史

「それがここクオリティ。」

剣汰

「意味分からんわ。」

スパーン！（毎度お馴染みハリセン攻撃）

高史

「がばっ!?!？」

剣汰

「どれ…今回のテーマは…」

…「変態の邂逅」…」

グシャツ（カンペを握りつぶす）

高史

「あ、キレた。」

「ごめんそれ作者の悪ふざけのダミーだから。  
本物こっち。」

（剣汰に本物のカンペを手渡す。）

剣汰

「…今回のテーマは、「最強の剣士VS真の道を行き、全ての変態の頂点に立つ男」だ。」

高史

「わーお、もはや雑談じゃねー」

真

「ほう…俺の相手をする「最強の剣士」とかいう偉そうな奴は誰だ？」

剣汰

「…俺だが？」

( 剣汰、豪竜胆構えてstandby ready )

真

「…マジで？」

明菜

「なるほど、槍使い同士の闘いとういわけね。」

サクヤ

「…剣汰さんって…どのくらい強いの…？」

高史？春花

「…名に恥じない。」

真

「いや、「剣士」なのに槍使ってるじゃん…」

剣汰

「んなことはどうでもいい。」

来い、お前の槍の腕、見せてみる。」

真

「上等だ！行くぞおおおおお！！」

( しばらく高史、春花、サクヤ、明菜の雑談をお楽しみください。 )

高史

「さて、明菜さんは銃火器使いとのことでしたな。」

明菜

「ええ、そうよ。」

高史

「実は俺も、「銃火器使いの剣士」の異名があるんですよこれが。」

明菜

「へえー。」

サクヤ

「…じゃあ…春花さんは…？」

春花

「私は、「炎氷雷の剣士」だよ。」

「ファイヤー」「ブリザード」「サンダー」のラウズカードを使うことが多いから。」

明菜

「その「」の剣士」って、自分で考えたんですか？」

高史

「いんや、他称。」

サクヤ

「…他称…？」

高史

「「自称」の反対だ。」

他、つまり周りからそう呼ばれてるってこと。

特に俺と剣汰兄ちゃんは、先代の呼び名を引き継いでるからな。」

明菜

「先代って…高史さんたちの前にも、三剣士がいたんですか？」

春花

「うん、先代は私と剣汰のお父さんとお母さんと、高史のお父さんだよ。」

ちなみに先先代が初代で、私と剣汰のお爺さんとお婆さんと、高史のお爺さんがメンバーだよ。」

高史

「ちなみに、俺の父ちゃんと爺ちゃんも、剣汰兄ちゃんの父ちゃんと爺ちゃんの義理の弟になってた。」

春花

「私のお母さんとお婆さんも、剣汰のお父さんとお爺さんと結婚したんだよ。」

ただ、兄妹同士だから、事実婚っていう形だけだ。」

サクヤ

「…春花さんたちの家族…ある意味すごい…」

明菜

「うん、なんか、歴史を感じるね。」

高史

「まあ、この関係が戦国時代から続いてきたとのことだからな。」

明菜

「戦国時代から!?!?」

サクヤ

「…やっぱり…すごい…」

春花

「そういえば、サクヤさんたちのチーム、もうすぐ試合があるんですよね?」

サクヤ

「ん…試合というより…戦い…」

高史

「なにやら、相手には不吉な噂があると聞きましたが?」

相手チームのメンバーと裏取引をして、対戦時に仲間を裏切るように仕向けるそうぞうで。」

明菜

「高史さん…そんなことどこで…!?!?」

高史

「俺は情報入手が得意なんでな。」

それより、とりあえずやつは絶対裏切るな…」

(高史、真の方を見る)

剣汰

「…はあっ！」

真

「負けるかあああああ！」

高史

「さすがのあいつでも、すぐにはやられないか。」  
サクヤ

「…やられるの…前提…」

明菜

「でしょうね。」

剣汰

「…終わりだ。  
はあっ！」

真

「ぐあああああ！」

高史

「あ、舞った。」

明菜

「勝負あり、ね。」

真

「…つ、強すぎる…」

(真敗北。 剣汰圧勝。 )

剣汰

「…腕は悪くない。」

強くなる余地はありそうだ。

まあ、性格がそれじゃ永久に無理だろうがな。」

( 剣汰が立ち去り、高史がうつ伏せに倒れている真に近づき、しゃがむ。 )

高史

「お疲れ、いろんな意味で。」

このまま人生にもお疲れ言っとく?」

真

「嫌だよ!!!」

高史

「だよー」

でも、剣汰兄ちゃんがああいうってことは、お前さんじゃ腕はあるってことだ、ちったあ自信持て。」

真

「言われずとも、俺は自信の固まりさ!!!」

高史

「言つと思つた」

( 高史、真を仰向けにする。 )

真

「な、なんだ?」

高史

「さあ?」

( 高史、真の上に覆い被さった。 )

剣汰? 春花? 明菜

「「「な!?!」」」

サクヤ

「…?」

真

「お、お前なにして…」

高史

「そこは自分で考えようか。」

今この状況でお前がすべきことは…わかってるだろ?」

真

「お…おおおおおおおおお!!」

(真、高史の胸を鷺掴み。)

高史

「む、鷺掴みにできるほどあったか俺の胸。」

(真、そのまま高史の胸を揉む。)

真

「お…俺の長年の念願が…この手に…!」

ムニムニムニムニムニ

高史

「んっ…やばい…この感覚…癖になりかね…んあっ」

真

「うおおおおおいぞ貧乳ナイス貧乳!!」

高史

「ああ…男女の変態でよかった…」

この感覚…この気分…普通じゃ絶対味わえん…  
触るのももちろんいいが、触られるのもこれまたいい…」  
真？高史

「ふ…ふはははははははははは…」

剣汰

「…駄目ポ。」（フリーズ）

春花

「剣汰!？」

おや、これまた随分な状況ですな。

春花

「作者!？」

今までどこ行ってたの!？」

ちょっとブログに。

さて、そろそろ閉幕の時間が近いんだが。

春花

「もうそんな時間…」

サクヤさん、明菜さん、どうでしたか？」

サクヤ

「ん…楽しかった…」

明菜

「私も楽しかったわ。

サクヤと一緒にいられたし。」

春花

「ありがとうございます」

さて、珍しく剣汰がフリーズしてるし、高史もお楽しみ中だから、今回は春花が締めてくれ。

春花

「わかった。」

それでは、三剣士の雑談劇場出張版、次回もまた見てくださいな  
じゃーんけーんぼーん！（チヨキ）

うふふふふふふー」

## 第五回（後書き）

ツルギさん、リクエストありがとうございました！

ツルギさんの「バトル学園物語」もよろしくお願いします！

「バトル学園物語」は削除されました。

## 第六回

春花

「さてと、今回も始まりました、三剣士の雑談劇場出張版！  
司会の桜井春花です」

剣汰

「同じく、川口剣汰だ。」

そしてどうも、作者です。  
なんとまたしてもゲストがきてくれてるぞー

剣汰

「もはやゲストのおかげで続いていると言っても過言じゃないな。」

まさにその通り。

ゲストリクエスト全部片づけたら、あとはお前らの詳しい紹介くらいしかネタがない。

春花

「あはは…」

ちなみに今回のゲストは、再びディワールドさんのところからだ。

剣汰

「そういえばそうだったな。  
それじゃあ春花、紹介を頼む。」

春花

「わかった。」

今回のゲストは、「魔法少女リリカルなのはStrikerS&

amp・HEROS「より、

李小狼さんと李桜さんです、どうぞー！」

(ワーワー パチパチパチパチパチ)

剣汰

「ネタが切れたな作者。」

言わないで。

小狼？桜

「「こんにちはー！」」

春花

「ようこそ、三剣士の雑談劇場へ！」

小狼

「ってあれ？」

高史さんは？」

剣汰？春花

「「ああ、そこ。」」

( 剣汰と春花が指さすと、そこには、ぶっ倒れている高史がいた。 )

桜

「い、一体何が…!？」

剣汰

「三位一体龍王魔弾斬り(非殺傷設定)をぶち込んだ。」

理由は前回は参照。

小狼



「あはは…」

小狼

「風上たちの時も、こんな感じだったのか…？」

春花

「そうですね、雰囲気はこんな感じですよ。」

剣汰

「早速だが、この間は大変だったな。」

実は薄々予想していたが、やはりメフィラスの標的は小狼だったか…」

小狼

「全くだ。」

俺を別人にすり替えやがって…許せない！」

桜

「小狼くん…あの時は、本当にごめんね…」

小狼

「二回も言っただろ、良いって。」

剣汰

「いくらメフィラスでも、二人の絆にはかなわなかった、というわけか。」

小狼

「いや、二人だけじゃない。」

桜

「ツバサくんもいるし、光くんたちだって同じだよ。」

剣汰

「そうか…そうだったな。」

だが油断するな、確かにお前らのような絆は、堅く、誰にも壊せない。

だが、どんなに堅い絆でも、ふとした拍子に壊れてしまうことがある。

壊れ崩れるのは一瞬、だがそれを築き直すのは、元が堅ければ堅

いほど、途方もない時間がかかる。

そうなれば最悪の場合、どちらか片方が、更に最悪両方が命を落とすことも有り得る。」

小狼

「命を…!?!」

桜

「さ、流石にそんなことは…」

剣汰

「ある。」

実際：五年前、俺はそれで高史を死なせた…いや、殺した。」

小狼？桜

「「えっ…!?!」」

春花

「剣汰、流石にこれ以上は…!」

剣汰

「…ああ、そうだな。」

その後、高史はある裏技で生き返ったわけだが。」

小狼

「え…でも今…」

剣汰？春花

「「ああ、それは日常茶飯事だから生きてる。」」

小狼？桜

「「日常茶飯事!?!」」

剣汰

「それに…小狼だって、あの時桜が追いかけてこなければ、諦めてツバサに倒されていた、という可能性も否定仕切れない。」

…人間とは、そういうものだ。」

小狼

「……………」

剣汰

「だからこそ、お前たちは決してその「絆」を壊されるな。  
…俺と高史の様にだけは、絶対になるな。」

小狼？桜

「…はい！！」

剣汰

「さてと…シリアスになりすぎたな。」

春花

「そういうえば、ツバサ君はもうカップルになってるんですよね。」

桜

「はい、ヴィヴィオちゃんと幸せそうにしていますよ。」

剣汰

「それを良しとしない親バカ零斗、か…」

小狼

「あー…」

春花

「私や剣汰も親バカになっちゃうのかな…」

剣汰

「子供のうち二人は今まで同様くつつくから、大丈夫だろう。」

「…か第一、あんなになつてたまるか。」

小狼

「そつちですか…」

桜

「剣汰さんつて、零斗くんのこと嫌ってるんですか？」

剣汰

「そういうわけじゃないが…気づけばそういうこと言ってるな。」

春花

「…本能？」

剣汰？小狼？桜

「…「いやいやいや。」」

剣汰

「…ところで小狼、一つ頼みがあるんだが。」

小狼

「何ですか？」

剣汰

「俺と手合わせしてくれないか？仮面ライダーで  
ちよつと、こいつを試してみたくてな。」

( 剣汰、ロストドライバーを取り出す。 )

小狼

「それって確か、第四回で作者弟さんに与えられた…  
…分かりました、俺たちもそれを見てみたいし。」

桜

「うん」

剣汰

「…感謝しよう。」

( 剣汰、ロストドライバーを装着、小狼、アークルを出す。 )

春花

「せっかくだから、私たちも変身しませんか？」

桜

「賛成！」

桜、ほい鏡。

桜

「ありがとうございます」

( 春花はラルクバックルを、桜はVバックルを装着。 )

小狼

「変身！」

（小狼、仮面ライダークウガ？マイティフォームに変身。）

剣汰

「クウガか…そっちが平成の元祖なら、こっちは真の元祖でいくか。」

（剣汰、ライダーメモリを出し、スイッチを入れる。）

「仮面ライダー！」

（ロストドライバーにライダーメモリを挿入。）

剣汰

「変身：旧一号！」

（左手でロストドライバーを倒す。）

「旧一号！」

剣汰

「とう！」

（ロストドライバーから光が出て、剣汰、仮面ライダー旧一号に変身。）

春花？桜

「変身！」

(春花は仮面ライダーラルクに、桜は仮面ライダーファムに変身。)

旧一号

「さてと…いくぞ。」

クウガ

「ああ…来い！」

はい、残念ですが閉幕のお時間です。

旧一号？ラルク？クウガ？ファム

「ここです！」

旧一号

「仕方ないか。」

小狼、桜、どうだった？

ファム

「楽しかったです！」

クウガ

「来て良かった！」

ラルク

「ありがとうございます」

旧一号

「そうだ、「Strikers&amp;HEROS」の最終回に、俺たち三剣士が三人揃って出演するから、そちらも宜しく。」

クウガ？ファム

「宜しく願います！」

ラルク

「それでは、次回もお楽しみに」

旧一号

「死ぬ気で見るよ。」

## 第六回（後書き）

今回のあとがきは、ライダーメモリと三剣士の容姿の説明です。

ライダーメモリ

旧一号からオーズまでの、全ての仮面ライダー（悪のライダーを含む）の記憶を内包している。のだが、ディケイド、ディエンド、ダブル、カイザ、ラルクは諸事情により無い。

ダブルの代わりに、ダブルのメモリの記憶を内包している。

メモリのスイッチを押し、ロストドライバに挿入して、なりたい仮面ライダーの名前を言ってロストドライバを倒すことで、その仮面ライダーに変身する。

変身する際の肉体変化のプロセスは、その仮面ライダーと同じ。

（例：一号？二号なら本文の通り、ファイズならフォトンブラッドが出て装甲が形成、響鬼なら燃える。）

変身後、いったんロストドライバを起こし、再度倒すことでマキシマムドライブが発動し、変身したライダーの必殺技を使える。

専用武器や必殺技に必要なアイテムは、メモリから出現する。

（例：BLACK RXならリボルケイン、響鬼なら音撃棒と音撃鼓、アクセルトリアルならトリアルメモリ）

次は三剣士の容姿。

剣汰：「無双OROCHI 魔王再臨」の源義経

春花：「ポケットモンスター アドバンスジェネレーション」のハルカ

高史：「あか ぷろ！！！！〜明るい三姉妹プロジェクト〜」の明井光

…高史だけ今まで容姿を明確に決めてなかったので…めがっさ迷いました。

「あか ぷろ！！！！」って何？」という方は、コンプエース9月号をお読みください。

ディワールドさん、二度目のリクエストありがとうございました！！  
ディワールドさんの「魔法少女リリカルなのはStrikerS & a m p・HEROS」、最終回、必見です！！！！

「魔法少女リリカルなのはStrikerS & a m p・HEROS」は削除されました。

## 第七回という名の緊急召集編

そろつたか三剣士よ。

高史

「何事じゃい。」

春花

「なんだか軽く焦ってるみたいだけど？」

剣汰

「何があつた？」

…最近、高史の娘の風羅と、春花の娘の春野を、感想担当で出したじゃん。

春花

「春野にいたつては、ディワールドさんの「魔法少女リリカルなのはVivid&amp;HERO」に出演して、カツミとくっついちゃったもんね。」

最近も、「Vivid&amp;HERO外伝」に、私と一緒にゲスト出演したし。」

そう…その二人のこと考えてたら、ついさっき気づいたことがある。

高史

「何じゃい？」

…この雑談劇場の第一回で公開したお前らの年齢は、風羅と春野がまだ生まれてすらいない頃のだということだ！！

高史？剣汰？春花

「……な、何だつて……！！！！……」

というわけで、カツミとくつついた春野を9歳とした時のお前らの年齢を、改めて公開する！

剣汰

「それで本来の第七回すつ飛ばしたのか……」

じゃあいくぞ……これだ！

川口剣汰 37歳

川口高史 34歳

桜井春花 31歳

高史？剣汰？春花

「……一気に老けたなおい！！！！……」

すまん！！orz

春花

「それにしても……もうそんなになっちゃったんだね……」

高史

「戦い始めたのは……もう24年前になるのか……」

時が経つのは早いもんだ、本当に……」

剣汰

「俺たちの世界はもうすっかり平和だが……まだ平和じゃない世界もいくつかある。」

高史

「そういう世界がある限り、俺たち三剣士の戦いは終わらない、っ

てことですか。」

春花

「私たち三人なら、どこまでだって戦っていけるよ！」

高史

「ですか。」

剣汰

「ああ。」

さて、もう一つ公開しようとしてるものがある。

高史

「まだあのかい!?!」

お前ら、デイワールドさんの「魔法少女リリカルなのはStrike & amp; HEROS」に出演した時、敵が巨大化したらばぶられてたじゃん。

高史

「そついや確かに…」

剣汰

「仕方ないだろう、作者が俺たちのウルトラマンの設定を出さなかったんだからな。」

ということで、ウルトラマンはまだできないが、お前らが「レイオニクス」だという設定を公開する！

高史

「マジかい。」

ということで、三人が使役する怪獣は、これだ！

川口剣汰

リオレウスシルバー（リオレウス希少種）

キリエロイド（カオスキリエロイドに進化可能）

川口高史

超コツヴ

キングジョーブラック

ダークザギ（原作の）

桜井春花

リオレイアゴールド（リオレイア希少種）

以上だ！

高史

「絶対驚かれる設定出しやがったなおい！？」

ちなみに、三人ともネオバトルナイザーを手に入れてるぞ。

剣汰

「そこはむしろ当然だろう。」

春花

「だよな。」

さてと、今回は以上だ！

高史

「さっさと次回書けよ作者。」

善処する。

では、次回もお楽しみに！

## 第八回（前書き）

ようやく書きあげました…

## 第八回

剣汰

「さてと、そろそろここで言うネタも切れたが、始まったぞ三剣士の雑談劇場出張版。」

司会の川口剣汰だ。」

春花

「同じく、桜井春花です」

高史

「そして、前前は結局終始くたばったままだった、同じく司会の川口高史です。」

剣汰？春花

「「自業自得だ。」」

高史

「わかつとるわ!！」

んでもって、どうも作者です。

高史

「そついや作者。」

俺の娘の風羅と、春花の娘の春野はもう活躍しとるが…剣汰兄ちゃんのはなぜいない？」

…名前、弟に聞かなきゃ。

剣汰？高史？春花

「「「そついうことか!」「」」

それはさておき、今回もゲストが来ているわけだが、なんと今回は

作者さんが自ら来てくださってるぞ。

高史

「マジでか!？」

マジだ。

じゃ、高史紹介よろ。

高史

「了解、今回のゲストは、

「WOLFANG・ウルフアング」狼男は不良少年」より、  
月臣輝刃と作者の月光閃火さんです、どうぞ！」

(ワーワー パチパチパチパチパチ)

輝刃

「…どうも。」

月光閃火

「どうも」

春花

「ようこそ、三剣士の雑談劇場へ！」

月光閃火

「ここが…」

そして、貴女が…高史さん…」

高史

「おや、俺に興味がおありで？」

月光閃火

「はい、是非いろいろお話ししてみたいと…」

高史

「ほう…俺も好かれたものですなあ…」

剣汰

「まさか、高史を好く奴が男であいつ以外にもいたとはな。」

月光閃火

「…あいつ?」

それについては、今はまだちょっと…

輝刃

「剣汰、早速だが、俺と一戦組み手をしてくれないか?」

剣汰

「…俺と、だと?」

輝刃

「ああ、「最強」と呼ばれるお前の力、見てみたい。」

剣汰

「…いいだろう。」

輝刃

「ありがとう。」

それじゃあ…!」

(輝刃、覚醒して人狼の姿に。)

春花

「ええええええ!?!」

剣汰

「ほう…」

高史

「どーなっとなるんじゃこれ…」

月光閃火

「輝刃は、人狼の末裔なんですよ。」

剣汰

「なるほどな…  
なら俺は…これでいくか。」

（剣汰、ロストドライバーを装着し、ライダーメモリを出し、スイッチを入れる。）

「仮面ライダー！」

（ロストドライバーにライダーメモリを挿入。）

剣汰

「変身…ジョーカー！」

（ロストドライバーを倒す。）

「ジョーカー！」

（剣汰、仮面ライダージョーカーに変身。）

輝刃

「あれが…仮面ライダー…」  
ジョーカー

「さあ…お前の罪を数えろ。」

輝刃

「え！？」

高史

「いや、罪無いでしょ！？」  
ジョーカー

「…不良。」

高史

「そこ!？」

ジョーカー

「とにかく…来い。」

輝刃

「ああ…行くぞ！」

(ジョーカーと輝刃、互いにぶつかり合う。)

以下、地の文はナレーションになります。

輝刃はジョーカーに次々と攻撃を繰り返すが、ジョーカーはことごとくいなしていく。

そして、攻撃の間をついて、ジョーカーは輝刃に一撃をいれていく。輝刃は一旦ジョーカーから距離をとると、ジョーカーに飛びかかり、両者は地面を転がった。

そして輝刃は、その勢いでジョーカーを投げ飛ばした。

ジョーカーは地面を転がったが、すぐに起きあがった。

そして、立ち上がった輝刃に強烈な跳び蹴りを喰らわせた。

輝刃

「くっ…！」

ジョーカー

「…まだまだ、これからだ。」

ジョーカーは輝刃に向かって走り出し、殴りかかった。

ジョーカーの拳は輝刃の胸に命中し、それを皮切りに、ジョーカーは輝刃に連続攻撃をたたき込む。

しかし輝刃も負けじと、ジョーカーを爪で引っ掻き、ジョーカーの装甲から火花が散った。

そして輝刃は、ジョーカーを連続で引っ掻き、とどめに殴り飛ばし

た。

しかし、ジョーカーはなんとか着地した。

ジョーカー

「流石にやるな…俺に挑むだけはある。

だが…これで決める！」

ジョーカーはライダーメモ리를 로스트 드라이버から抜くと、腰のマキシマムスロットに挿入した。

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

ジョーカー

「…ライダーキック！」

ジョーカーは、左足に紫色の光を纏わせ、輝刃に跳び蹴りを放った。輝刃は両腕を構えたが、受け止めきれずに吹っ飛んだ。

輝刃

「ぐあああああああつ！」

輝刃は地面を転がり、人間の姿に戻った。

高史

「はい、剣汰兄ちゃんの勝ち。」

春花

「剣汰はもちろんだけど、輝刃さんも強かったよ！」

ジョーカーは変身を解き、輝刃に歩み寄った。

剣汰

「…なかなか強かったぞ。」

剣汰は輝刃に手を差し伸べた。

輝刃

「…剣汰も、最強と呼ばれるだけはあるな。」

輝刃は剣汰の手をとり、立ち上がった。

(以下、地の文は作者セリフに戻ります。)

さて、決着ついたところで、雑談タイムといこうか。

月光閃火

「そういえば、高史さんはなんでそんな口調なんですか？」

高史

「男女だから。」

剣汰

「合ってるけど違うだろ。」

高史

「ぐっ…わーったよ。」

実は俺、生まれつき声帯に障害があつてさ、女の子なのに声だけ男、ってやつだったんだよ。

で、このままだといじめの格好的になる、って危惧した俺の父ちゃんが、戸籍の性別変えてまでして、俺を男として育てることにしたんだよ。」

月光閃火

「できるんですか、そんなの…!?!？」

高史たちの世界は、できるようになってるんですよ。  
というか俺がそう設定した。

月光閃火

「なるほど…苦勞してたんですね…」

高史

「苦勞したのは主に父ちゃんと母ちゃんかな。

俺は物心つく前から男として育てられてたから、何の問題もなく  
根付いた。

その証拠として、今の俺があるからな。」

月光閃火

「でも、今は普通の女の人の声ですよね？」

高史

「ああ、18年前に、とあるやつが治してくれた。

そのへんはいつか「三剣士の過去」で語るよ。」

剣汰

「俺たちの設定、まだ公開されていないのが結構あるからな。」

輝刃

「例えば…？」

高史

「ウルトラマンブレードとウルトラマンソードとか。

一応「過去」で名前は出たけど。」

春花

「本当にいろいろあるよね。

今全部公開することはできないけど。」

剣汰

「その内公開していくから、気長に待っていてくれ。」

月光閃火

「そうですね。」

高史

「そういうや、月光さんは恋愛にあまり縁がなかったそうですね。」  
月光閃火

「はい、だから雑談劇場の第五回を見たときは…はう〜」（鼻血）

輝刃

「またか…」

剣汰

「これは相当だな…」

高史

「ムツツリー二じゃあるまいし…」

春花

「いや、あれと一緒にしたらかわいそうだよ…」

高史

「それもそうだな…」

まあ、恋愛経験ないやつなんて普通にいますよ。

うちの作者なんて、ないどころかする気すらないから。」

俺は三次元の女に興味がないんでな。

月光閃火

「もし告白されたらどうするんですか？」

無論断る。めんどい。

「フーか実は、小学生の時に、一度だけラブレターもらったことあるんだぞ俺。」

げた箱に入ってたっつーベタな感じで。

春花

「嘘ー!？」

輝刃

「それで、どうしたんだ？」

返事の手紙書いたんだけど、出すの渋ってたら自然消滅した。  
今となっては、相手はもう俺のことは忘れてるっばい。

剣汰

「何してんだよお前は…」

で、今となってはすっかり二次元の虜で、現実には興味ないのだよ。

月光閃火

「なんか、残念な感じがしますね…」

高史

「色んな意味で末期だから、うちの作者。」

さて、そろそろ閉幕のお時間です。

高史

「月光さん、輝刃さん、どうでした？」

月光閃火

「幸せでした…」（鼻血）

輝刃

「なかなか楽しかった。」

春花

「ありがとうございます」

高史

「とりあえず…月光さん。」

月光閃火

「はい？」

（高史、月光閃火の両肩に手を置く。）

高史

「…「WOLFANG」、更新しようか。」

月光閃火

「…はい。」（鼻血）

輝刃

「鼻血を拭け…」

春花

「あはは…」

剣汰

「それでは、次回もお楽しみに。」

高史

「ゲツゲ〜口〜」

## 第八回（後書き）

月光閃火さん、大変お待たせいたしました。

月光閃火さん、リクエストありがとうございました！

月光閃火さんの「WOLFFANG - ウルフファング -」狼男は不良少年「も、よろしく願います！」

## 第九回

高史

「さてと、今回も始まったぜ三剣士の雑談劇場！

んでもって今回からは、「出張版」を取っ払ってスタートだ！！」

剣汰

「とうとう取っ払ったか。」

春花

「いいんじゃない？」

高史

「とりあえず、司会の川口高史です！！」

剣汰

「同じく、川口剣汰だ。」

春花

「同じく、桜井春花です」

そしてどうも、作者です。

今回はわりと重大な発表がある。

高史

「何だ？」

…キャラを八人増やす！

高史？ 剣汰？ 春花

「『多すぎるだろ！！ガンバライド第十一弾じゃあるまいし！

！！』」

まあ、内三人はもう出てる奴だけだ。

春花

「どついう事？」

まず三人の内二人、カモン！

風羅

「どうも、川口高史の長女、川口風羅です！」

春野

「川口剣汰及び桜井春花の長女、桜井春野。」

剣汰

「そついうことか。」

風羅

「高史お母さん！」

高史

「来たか風羅！」

風羅

「うん！」

春野

「お母さん。」

春花

「いらつしゃい、春野。」

春野

「うん。」

剣汰

「それで、残りの一人は誰なんだ？」

それじゃあ、その一人を含む三人、カモン！

雷斗

「よう、剣汰。」

剣汰

「…そういうことか。」

浩司

「まさか、僕たちまで出られるとはね。」

高史

「ぶっ!?!」

春日

「やつほー春花!」

春花

「春日!?!」

おまえら、とりあえず自己紹介。

雷斗

「そうだな。」

剣汰の兄の、山口雷斗だ。」

浩司

「はじめまして、高史の実の兄の、川口浩司です。」

春日

「春花の姉の、桜井春日です。」

雷斗はディワールドさんの「仮面ライダーダークディケイド」も  
う一人の世界の破壊者」の感想担当として出してて、どうせだか  
ら浩司と春日も一緒に出してしてみた。

浩司

「たしか「三剣士の過去」の方で出してから出す、って聞いてたん  
だけど。」

まあそれだと、僕が出るのはもう少し先になってたかな。」

春日

「それだったら私はずっと後だよ」（泣）

雷斗

「…俺が一番最後かつ遥かに先なんだが？」

浩司？春日

「「あー…」」

高史

「で、残るは三人…誰よ？」

今来たよ、一人。

春花

「え？どこ？」

タッタッタッタッタッタ

？

「はーるのっ！」

春野

「がふっ！？」

春花？風羅

「「春野！？」」

（突然幼女が走ってきて、春野に突っ込んだ。）

？

「えへへー」

春野

「…春音、自己紹介。」

春音

「うん！」

春野のいもーとの、桜井春音です！6歳です！」

春野

「…よくできた。」(ナデナデ)

春音

「えへへー」

春野

「…でも…体当たりは…勘弁…」(ガクッ)

春音

「あれ？春野？」

春花？風羅

「「春野ー！？」」

(高史、そつと春野に近づく。)

高史

「…お前が逝つたら、カツミが悲しみのあまりツバサに負けちまうぞ。」

春野

「それは駄目。」(ガバツ)

高史

「のわっ!？」

春音

「あ、春野起きたー」

春野

「…春音、もう6歳なんだから、少しはおとなしくしなきゃ駄目だよ。」

春音

「うん！春音、おとなしくする！」

春野

「…私はカツミを好きになったから、もう三剣士にはなれない。」

…だから、春音がちゃんとしなきゃ駄目だよ。」

春音

「うん！春音、ちゃんとする！」

春野

「…春音は良い子。」（ナデナデ）

春音

「えへへー」

高史

「で、残りの二人は誰なわけ？」

んじゃ、最後の二人、カモン！

（雰囲気の似た男性と少年登場。）

カラミティア

「…俺の名は禍羅魅星司。」

川口高史の夫だ。

カラミティアと呼べ。」

星夜

「俺は禍羅魅星夜。」

川口高史と禍羅魅星司の長男で、川口風羅の弟だ。」

高史

「お前らかいいいいいい！？」

カラミティア

「…まあ、俺たちもまさか出られるとは思ってなかったからな。」

剣汰

「正体が正体なだけに、か。」

カラミティア

「そついうことだ。」

風羅

「星夜も出られたんだね！」

星夜

「ああ、風羅姉さん。」

ふいー、これで追加は全部だ。

剣汰

「随分と増えたな……」

高史

「作者を入れて十二人……雑談するには多すぎるだろ。」

ああ、だからこれからは、テーマやゲストに合わせて、俺を除く十人の中から三〜四人司会を選抜する。

春花

「流石にね……」

浩司

「……僕がいる必要、有る？」

春日

「今更気にしちゃ駄目だよ浩司。」

雷斗

「そうそう。」

カラミティア

「出た以上は、いつか出番が来るだろう。」

星夜

「俺は「魔法少女リリカルなのはVivid&amp;HERO」の感想担当に配属されるそうだけど。」

風羅

「星夜も!？」

春音

「春音もだよ」

春野

「…そうなんだ。」

剣汰

「…ぐちゃぐちゃしてきたな。」

高史

「これくらい序の口だよ。」

でも「春」が多い！いつか絶対間違えるぞ作者！」

それじゃ、今回はこの辺で、閉幕です。

全員

「次回もお楽しみに！！！」

## 第九回（後書き）

雷斗、浩司、春日、春音、カラミティア、星夜について軽く紹介しましょう。

山口雷斗

年齢 39

容姿 無双OROCHIの真田幸村

武器 十文字槍

剣汰の兄で、同じく槍使い。

実力は剣汰と互角。

炎を操る力を持つ。

川口浩司

年齢 34

容姿 無双OROCHIの陸遜

武器 双剣

高史の双子の兄。

容姿は異なるが、昔は声はそっくりだった。

双剣使いで、攻撃力とスピードを底上げする「鬼人化」という力を持つ。

桜井春日

年齢 31

容姿 無双OROCHIの大喬

武器 鉄爪

春花の双子の姉。

春花ととても仲がよく、雷斗と浩司とも仲がいい。

恋をしている相手がいるが、今はまだ秘密。

桜井春音 さくらい はるね

年齢 6

容姿 みつどもえのふたばが普通の服着た姿。

武器 未所持

春花の次女で、春野の妹。

常に元気いっぱいかつ無邪気。

春野がカツミとくつついたので、春花を継ぐ四代目三剣士候補となつているが、性格のせいもあつて未自覚。

禍羅魅星司 からみ せいじ

年齢 不詳

容姿 無双OROCHIの服部半蔵が顔を出した姿。

武器 ダークホロスナイパー

高史の夫で、風羅と星夜の父。

周りからは「カラミティア」と呼ばれている。

とある理由により、高史とは別姓としている。

禍羅魅星夜 からみ せいや

年齢 9

容姿 カラミティアをそのまま9歳児程度に縮めた感じ。

武器 未所持

星司の長男で、風羅の双子の弟。

風羅とは、互いに軽くシスコン、ブラコンが入っているほど信頼し合っている。

カラミティアをととても尊敬している。

…容姿がほとんど無双OROCHIキャラです、はい。  
理由はご希望が有ればお話しします。

では、今回お見せします。

第十回（前書き）

めがっとな長いです。

## 第十回

剣汰

「さあ、ちよつと久しぶりに始まったぞ三剣士の雑談劇場。司会の川口剣汰だ。」

春花

「同じく、桜井春花です」

春音

「おなじく、桜井春音です！」

そしてどうも、現在お月見団子を食べながら執筆中の作者です。

剣汰

「さて、この雑談劇場も、ついに今回で十回目だ。」

(ワーワー パチパチパチパチパチ)

春花

「これも、ディワールドさんを始めとする応援してくださる皆さんのおかげです！」

剣汰

「で、そんな記念すべき回に、レギュラーのはずの高史がない、と。」

『チクシヨーーーーー!!!』

春花

「負け犬の遠吠えが聞こえたね今。」

剣汰

「サラッと酷いなお前。」

さてと、今回のゲストは、なんと逆指名だ。

剣汰

「いつもはリクエストだったからな。」

春音

「おカーさんがぎゃくしめーしたのー」

ということで春花、紹介よろ。

春花

「わかった。」

今回のゲストは、「ゼロの使い魔」光の戦士達を受け継ぎし者」より、カツミと桜井春野です、どうぞー！」

カツミ

「こんにちは。」

春野

「…今は「ゼロ使」の世界に行ってるから、今回はゲスト側。」

春野

「よーこそ、三剣士の雑談劇場へ！」

それから、はじめまして、カツミおにーちゃん！

カツミ

「おにーちゃん!？」

春音

「春音はカツミおにーちゃんのいもーとだから、カツミおにーちゃんは春音のおにーちゃんなのー！」

カツミ

「あ、ああ、そうだな。」

剣汰

「…お前がカツミか。」

春花から話は聞いている。」

カツミ

「あなたが剣汰さん、ですか。」

初めまして、カツミです。」

春野とお付き合いさせてもらっています。」

剣汰

「ああ、聞いている。」

さて、さっそくだが…お前の实力を見せてもらおう、三分間だけ、  
な。」

( 剣汰、武雷の小手を構える。 )

カツミ

「…わかりました。」

( カツミ、ライガフラッシャーを取り出す。 )

春音

「カツミおにーちゃんとおとーさん、なにするのー?」

春野

「…春音、危ないから離れて。」

( 以下、地の文はナレーションになります。 )

剣汰

「…行くぞ。」

カツミ

「はい！ライガーーー！！」

カツミはライガフラッシュャーを空に掲げ、ウルトラマンライガに変身した。

剣汰は武雷の小手をメビウスのように構え、に左手を被せるように添えた。

すると、武雷の小手に納められた「剣の光」が解放され、光り輝いた。

そして剣汰は、右腕を腰まで引いた後、メビウスのように小手を空に掲げた。

剣汰

「…ソード！」

剣の光が溢れ出して剣汰を包み、剣汰はウルトラマンソード ライトニングフォームに変身した。

ライガ

「見たことのないウルトラマン…！」

ソード

「…ウルトラマンソード、ライトニングフォームだ。」

ライガ

「フォーム…？」

ソード

「アグルでいうV2だ。」

詳しいことはいずれ「過去」で語る。」

ソードは右腕を構えて振り払うと、武雷の小手が変化した「アームドスパーク」から雷の刃「ライトニングソード」が出現した。

それを見たライガは、ジュネッスブルーに変身し、シュトロームソ

ードを出した。

そして、両者は走り出し、互いの剣をぶつけ合った。

ライガのシュトロームソードとソードのライトニングソードが何度もぶつかり合い、火花を散らす。

だが、ソードは一瞬の隙をつき、ライガを蹴り飛ばした。

その威力はライガにとって意外で、ライガは大きく吹っ飛ばされた。

ライガ

「うわあああああっ！？」

ライガは何とか着地し、ソードを見据える。

ライガ

「一撃でこんなに…」

これが…最強の剣士の實力…」

ソードはライガに一気に接近し、ライトニングソードを振るう。

ライガもシュトロームソードで応戦し、再び火花が散る。

ライガ

「強い…！」

ソード

「敢えて言おう、当然だ。」

ソードはとうとうライガを斬りつけた。

ライガ

「うわあああっ！！」

春野

「…カツミ、頑張つて…！」

春花

「無理に勝とうとしないで！」

あなたの全力を、剣汰に見せて！」

ライガ

「アローレイ？シュトローム！」

ライガは必殺技を放つが、ソードはそれを斬り払った。

ライガ

「駄目か…！」

ソード

「…まだ、だろ？」

ライガ

「当然です！」

ライガは再びシュトロームソードで斬りかかる。

ソードはそのライガの腕を持つと、背負い投げを決めた。

ライガ

「ぐっ！？」

ソード

「…流石に一方的すぎる、か。」

ライガ

「まだです！」

ライガはジュネッスに変身し、ソードに挑んだ。

ソード

「…剣じゃ勝てないと悟ったか。」

ソードもライティングソードを消し、ライガを迎え撃つ。

ライガは隙を出さないよう攻め続け、ソードはライガの攻撃を全て受け止める。

ライガ

「攻撃しないんですか!？」

ソード

「…わからないか？」

ソードはライガの両拳を受け止めた。

ソード

「…お前の攻撃に隙がなかったんだよ。」

ライガ

「えっ…!？」

ソード

「…さっきまでの話、だがな。」

そういつて、ソードはライガに巴投げを決めた。

ライガ

「ぐあっ!？」

ソード

「…そろそろ時間か。」

ソードのカラータイマーが点滅していた。

それはライガも同様であった。

ソードは必殺技の構えをとり、ライガも必殺技を構えた。

ソード

「これで決まりだ。」

ライガ

「はい…！」

オーバーレイ？シュトローム！」

ソード

「…ソードストライク光線！」

両者の必殺光線がぶつかり合った。

ライガ

「うおおおおおおおおお！！」

ソード

「…これが、こいつの「想い」、か。」

ソードはそう呟くと、一気に光線の出力を上げ、あっという間にオーバーレイ？シュトロームを押し返し、ソードストライク光線を命中させた。

ライガ

「ぐあああああああ！」

ライガは地に倒れ、変身が解けてしまった。それを見たソードは、変身を解いた。

春野

「…カツミ…！」

春野はカツミに駆け寄った。

カツミ

「…負けた…完全に…」

剣汰がカツミに歩み寄る。

剣汰

「…お前の実力、そして想い、確かに見せてもらった。」

カツミ

「剣汰さん…」

剣汰

「まさか、「負けたから春野はやらん」と俺が言っと思っっているのか？」

カツミ

「えっ…？」

剣汰

「…お前には、守るべき者がいる。」

それを守りたいという確かな「想い」がある。

それが…十分、いや十二分に伝わった。

お前は、もっと強くなれる。」

カツミ

「それって…」

剣汰

「…「ゼロ使」の世界で結婚していい。」

春花

「話が飛びすぎだよ剣汰!!」

剣汰

「俺に乗り移って「春野は俺の嫁」と言わせるほどだ。」

問題ないだろ。」

春花

「あると思う！いろいろ！」

春野

「…カツミっ！」

春野はカツミに抱きついた。

カツミ

「春野…」

カツミも春野を抱き締めた。

そんな二人を、剣汰と春花は暖かい目で見守った。

くカツミ回復後

(以下、地の文は作者台詞に戻ります。)

さて、カツ春が剣春公認になったところで、雑談パートいこうか。

春音

「剣汰おとーさんもすっごくつよかったけど、カツミおにーちゃんもつよかったよ！」

カツミ

「ありがとう、春音。」(ナデナデ)

春音

「えへへー」

春野

「…春音、すっかりカツミに懐いた。」

春花

「きつと春日とも仲良くなれるよ、カツミ。」

カツミ

「そっですか？」

剣汰

「だろうな。」

春音

「春音も、つよくなって、三剣士になるのー！」

カツミ

「いや、春音まで戦うことは…」

第一、春野がいるし…」

春野

「…私は三剣士にはなれない。」

カツミ

「どうして…？」

春野

「…カツミを、好きになったから。」

カツミ

「…なんだよ、それ…！」

春野

「…一族の、暗黙の了解。

…三剣士になった桜井家の人間は、山口家の人間とくつつかなきゃいけない。

…今まで、ずっとそうしてきた。」

春花

「まあ、偶然か必然か、今まで自然にくつついてたからね。」

剣汰

「…よく続いてたもんだな。」

春野

「…でも、三剣士にならなくても、戦える。

…それに、私はカツミがいてくれれば、それでいい。」  
カツミ

「春野…」

春野

「…改めて言う。」

…私は、カツミが大好き。

…何があっても、ずっと愛してる。」

カツミ

「…俺も、春野が大好きだ。」

何があっても、絶対に春野を守る。」

(カツミと春野、唇を重ねる。)

カツミ

「ん／＼／＼」

春野

「…ん／＼／＼」

いやあ…俺のキャラが他人のキャラとくっつく日が来るとは…夢のようだ…

春花

「良かったね、春野。」

春音

「おしあわせに、なのー」

剣汰

「二人もバカツプルの仲間入り、か。」

分かっているとと思うが、式には呼べよ？」

カツミ

「それはもちろん！」

春野

「…忘れるわけない。」

高史

「カツ春に、神のご加護がありますように……」  
春花

「何でいるの負け犬!？」

高史

「負け犬言うな!!」  
意地でて出てやったわ!!」

もう閉幕だな。

高史

「だろうと思つたよ!!」

春花

「負け犬。」

剣汰

「負け犬。」

春野

「…負け犬。」

カツミ

「失礼します、負け犬。」

春音

「まけいぬ」

負け犬。

高史

「俺ってそんなに嫌われてたの!!??」

では、今日の締めはカツ春と剣春で。

春花

「それじゃあ、せーの……」

剣汰？春花？カツミ？春野

「「「次回も、三剣士の雑談劇場へ突っ走れ！……」」」

## 第十回（後書き）

多分雑談劇場史上最長となりました。

ディワールドさん、ありがとうございました！

ディワールドさんの「ゼロの使い魔（光の戦士達の力を受け継ぎし者）」及び「魔法少女リリカルなのはVivid&amp;HERO」も、よろしくお願いします！

「魔法少女リリカルなのはVivid&amp;HERO」は削除されました。

## 第十一回

剣汰

「さてと、とりあえず一ヶ月以上ぶりに始まったぞ三剣士の雑談劇場。」

司会の川口剣汰だ。」

春花

「同じく、桜井春花です」

そしてどうも、作者です。

春花

「…ってあれ？高史は？」

そこ。

高史

「……………」(いーじいーじ)

(そこには、しゃがみこんで地面に指でひたすら「の」の字を書いている高史がいた。)

春花

「…どうしたの？」

とぼけんな、お前のせいだろーが。

剣汰

「…ああ、前回のあのノリか。」

そう、あのせいですっかりいじけちゃってさ。  
あ、今ので300万回目だよ、「の」の字書いたの。

剣汰

「いつからやってんだ…?」

かれこれ一ヶ月以上。

剣汰

「あれからずっとやってたのか!？」

高史

「……………」(いーじいーじ)

セレナ

「まあまあ、そろそろ元気だそうよ。

春花ちゃんが悪気満載でやってたんだろうけど、他の人たちは悪気があったわけじゃないんだから。」

高史

「…そうなの?」

セレナ

「うん、きつと。

だから、元気出して!」

春花

「本つつつつつつつつ当にごめんなさい!」

セレナ

「ほら、春花ちゃんもああ言ってることだし。」

高史

「…そうだな…目標の300万回も達成したし…」  
セレナ

「それ目標だったんだ。」

高史

「よっしゃあ！一ヶ月ぶりに復活するぜ！！

というわけで遅れましたが、司会の川口高史です！

そしてこちらが今回のゲスト、

「魔法戦記リリカルなのは」逆心を抱く戦闘機人」より、セレナ？ファウスト少将です！」

セレナ

「どもども」

剣汰？春花

「誰かと思えばゲストだったのか！！」

高史

「さてさてこちらのセレナ少将「セレナでいいよ。」じゃあセレナは、まあ一言で言えばオタクなのですよ。

なのに少将というあのレジアイス…じゃなかったレジアス中將の一段下というお偉い方なのですよ。」

剣汰

「…高史、それはいくらなんでもレジアイスに失礼だ。」

高史

「…そうだったな…ごめん、レジアっち。」

セレナ

「そっちなんだ…否定はしないけど。」

レジアっち…作者が「ポケットモンスター ルビー」でレジアイスに付けているニックネーム

剣汰

「それに、実力もなかなかのものだ。」

リミッターでSだが、はずせばSSSだからな。」

高史

「剣汰兄ちゃんはライトニングでようやくSSSオーバーだからな。」

「

セレナ

「…それ、超されてるよね私。」

ていうか、剣汰さんも魔導士なの？」

剣汰

「俺だけじゃなく、高史と春花もだ。」

セレナ

「へー！それで、階級は!？」

剣汰

「俺は執務官で、実質的な階級は一等陸佐、お前の一つ下だ。」

高史

「俺は執務官補佐だ、もちろん剣汰兄ちゃんの。」

階級は一等陸尉。」

春花

「私も剣汰の補佐で、三等陸尉だよ。」

セレナ

「流石三剣士、階級も高いね！」

で、デバイスは？」

剣汰

「それに答える前に…セレナ、「魔弾戦記リュウケンドー」を知っているか？」

セレナ

「もちろん！」

我がウィキペディアに未知という言葉は無い！」

高史

「…電王しか仮面ライダー知らないのか？」  
セレナ

「うぐっ…」

春花

「そこは突っ込まないであげようよ……」

剣汰

「とりあえず、知っているなら話は早い。」

俺たち三剣士は、ミッドチルダでは魔弾龍をデバイスとして活動していた。」

セレナ

「そうなの!？」

でも…ゴッドゲキリュウケンやザンリュウジンはまだしも、ゴウリュウガンは質量兵器にならないの?」

高史

「ゴウリュウガンの弾丸を魔力弾にしてるから問題なし!

もちろん、ちゃんと非殺傷設定も付けてあるし。」

春花

「ゴッドゲキリュウケンとザンリュウジンは、人を攻撃するときには、非殺傷設定の斬撃魔法を纏わせてるから、大丈夫なんだよ。」

セレナ

「そうなんだ」

でも…魔弾戦士の魔弾スーツって、全身装甲だよな?

周りの視線とか気にならない?」

剣汰

「ミッドチルダにいる間だけ、何故か魔弾戦士が擬人化したようなデザインのバリアジャケット、その名も「魔弾ジャケット」になるから、そこまで異質には見られない。」

高史

「ミッドチルダ(あっち)で初変身したときは驚いたよ……」

春花

「うんうん。」

セレナ

「なるほど」

そういえば、剣汰さんはライトニングでSSSオーバーって言ったけど、もしかしてライトニングリユウケンドーの事？」

剣汰

「ああ、俺はモードチェンジに応じてランクが変わる。

ゴッドでS、バーニングとブリザードでSS、ライトニングでSSSオーバーだ。

だから、ライトニングは部隊長の許可を必要としている。」

高史

「あと、ファイナルキーも三人とも許可制にしてるんだよ。」

春花

「なのはちゃんたちのリミッター解除よりは、許可が出やすいけどね。」

セレナ

「つまり、レスキューフォースのファイナルレスキューみたいな感じ？」

高史？春花

「「そうそれ！！」」

さて、そろそろセレナの紹介に戻りますか。

春花

「セレナさん、装備もすごいよね。」

なんせ三種の神器を持ってるんだから！」

高史

「それに加え、籠手型インテリジェントデバイス「メガトンアーム」に、魔導書型デバイス「風土記」、そして魔力食うけど未来を見れる「日本書紀」だろ？」

そついや、セレナの装備って日本史関連がほとんどだよな。」

セレナ

「まあ、うちの作者が日本史得意だからね。」

春花

「なるほど〜」

高史

「うちの方も、世界史よりは日本史だよな？」

生憎、世界そこに興味は無いんでね。

I love Japan very much!!

高史

「とか言いつつ思いつきり英語使ってるじゃねーか。」

お前だって、英検一級持つてるくせに。

俺はまだ準二だけど。

セレナ

「私は英検だけじゃなく、漢検と数検も一級だよ!」

春花

「すごい!」

高史なんかよりずっと凄いよセレナさん!」

セレナ

「いやー照れるなー」

高史

「おいコラ、さりげなく俺を貶さなかったか?」

春花

「いつものことですよ。」

高史

「自覚しとんのかい!」

春花

「ふん、口喧嘩で必ず私に負けるくせに。」

高史

「んだとコラア!!」

春花

「何よ!!」

(高史vs春花の喧嘩勃発。)

セレナ

「いいの?止めなくて。」

剣汰

「…まあ見てろ。」

(3分後…)

高史

「……………」orz

春花

「ふん。」

(春花圧勝、高史惨敗。)

セレナ

「本当に勝っちゃった…」

剣汰

「…いつものことだ。」

「そういえば、そっちの戦闘機人事件の方はどうなっている?」

セレナ

「何とか襲撃にきた戦闘機人は追い払って、ひとまず一段落だよ。」

剣汰

「そうか。」

奴らの能力は、どれも厄介だ。

チートであるお前といえども、油断するなよ。」

セレナ

「もちろんだよ。」

あと、チートじゃないから！ここ重要！！」

剣汰

「…そうか、ならそういうことにしておっづ。」

さて、そろそろ閉幕のお時間です。

高史

「もうそんな時間か。」

で、どうだったよ？セレナ。」

セレナ

「とつても楽しかったよ！！」

三剣士にも会えたし！」

春花

「ありがとうございます」

では、今回の締めは全員で。

(作者、全員にカンペを渡す。)

剣汰

「…なるほどな。」

高史

「そついうことが。」

春花

「言ってみたかったんだよね、これ！」

セレナ

「よし、じゃあ早速やろつよ！」

高史

「ですな。」

「んじゃ、せーの……」

高史？ 剣汰？ 春花？ セレナ

「……テイク、オフ……！！！！」

## 第十一回（後書き）

タケケさん、大変お待たせいたしました。

タケケさん、リクエストありがとうございました！

タケケさんの「魔法戦記リリカルなのは」逆心を抱く戦闘機人」も、よろしく願いします！

## 第十二回という名の緊急番外編

さて、急遽作者権限で全キャラ集合させました。

高史

「何事じゃ。」

剣汰

「俺まで呼ぶとは…相当な事らしいな。」

風羅

「一体何なの？」

春野

「…さあ？」

では説明しよう。

月光閃火さんが、「あなたの声優は誰？ったー」というのをやった  
とのことなので、早速俺もここに出てる全キャラでやってみたわけ  
よ。

114

春花

「それで、その結果を発表する、ってこと？」

そゆこと。

春日

「へえー！面白そう！」

雷斗

「確かに、興味あるな。」

浩司

「そうですね。」



「嘘おおおおおおおおお!?」

春花

「剣汰の次に有り得ない……」

では、大暴走してる川口兄妹はほつといて、次は兄妹組いつてみよ  
う!

雷斗? 浩司? 春日

「ドキドキ……」「」

山口雷斗 水島大宙

川口浩司 喜多村英梨

桜井春日 佐藤利奈

浩司

「僕の声優絶対女性ですよねえ!？」

春日

「お、おちついて浩司! 剣汰だってそうだったじゃない!」

浩司

「そ、そうですね……」

雷斗

「それで、キャラで言うとな誰になるんだ?」

雷斗が「ひだまりスケッチ」のゆのの父、浩司は「フレッシュプリ  
キュア!」のキュアベリーと「Angel Beats!」のユイ、  
春日が「みなみけ」の南春香。

浩司

「剣汰さん以上に救いようがないじゃないですかあああああああ  
ああああ!」



風羅

「お、お母さんの目がこれまで以上に危ない…（泣）」

星夜

「エーリカは今のところ、作者と母さんが一番好きなキャラだからな…」

風羅

「偶然にも程があるよお…」

では、次は次世代桜井姉妹いこうか。

春野

「…気になる。」

春音

「わーい！」

桜井春野 堀江由衣

桜井春音 林原めぐみ

全員

「大物声優来たあああああああああああああ…!!??」

春音

「ねーねー、春音はだれなのー？」

…「新世紀エヴァンゲリオン」の綾波レイ。

全員

「こっちも超有名だったあああああああ…!!」

姉妹揃って…恐ろしい娘！





## 第十二回という名の緊急番外編（後書き）

男性陣は雷斗以外全員女声という結果に…  
流石にシヨックでしたorz



「言わせねえよ!?!」

…チツ。

風羅

「それで作者さん、今回のゲストは？」

ああそれなんだけど、リクが底をつきました。

高史・春花

「「はあ!?!?!」」

つーことで、リク募集中

高史

「…来てもどうせ書かないくせに。」

風羅

「でも、これやってるってことは、何かテーマはあるんですよ?」

その通り。

んじゃこれ、今回のテーマね。

(作者、カンペを風羅に渡す。)

春花

「カンペ扱いは相変わらずなのね…」

風羅

「えーっと、今回のテーマは、「キャラ大量追加Part2!!」です!?!」

高史・春花

「「またかよ!!」」

だって、まだ出てないキャラ結構いるんだから。主にお前らの家族。」

高史

「家族以外のキャラ出せや!!」

つい先日、短編にてダークカモン出しました。

高史

「ここでも出せよ!!」

もちろん出すよ、いつか。

高史

「「いつか」!?!」

「そのうち」「じゃなくて」「いつか」!?!」

春花

「…高史、そろそろ進めよう。」

これ以上は時間の無駄だわ。」

高史

「…風羅、よろ。」

風羅

「今回の追加キャラは全部で6人です!

それじゃあ、まずはこの4人から!」

風司

「どもー、高史の親父の、川口風司だぜ!!」

楓



最斗

「知るか。」

(最斗、登場早々に退場。)

春美

「最斗は雑談するような人じゃないからね……」

楓

「剣汰がいたらいてくれたかもしれないね……」

高史

「さてと、残る二人は……」

風羅

「続いては、この人です!!」

雲夜

「たーかしっ!!」

高史

「のわあああああつ!!?」

春花

「…今日はよく抱きつかれるわね、高史。」

高史

「いやまだ2回目なんだが!？」

「とりあえず離れる!そして自己紹介しろ!!」

雲夜

「はい」

「高史と浩司のお姉ちゃんの、川口雲夜です」

高史

「だから離れろっつーの!」

「抱きつくなら雷斗に行けや!!」

雲夜

「雷斗には毎日抱き着いてるから、たまには高史にも」

高史

「あんたもか!!」

「いや言う俺も俺だけど!!」

春花

「…しかも、ここに雷斗いないし。」

風司

「逃げ場は無いぞ!!」

高史

「パクってんじゃねえよパクリの塊が!!」

風司

「酷っ!?!」

春花

「…風羅ちゃん、最後行っちゃって。」

風羅

「わかりました。」

最後の一人は、この人です!!」

槍汰

「お初にお目にかかる。」

川口剣汰の息子にして、四代目三剣士筆頭の、川口槍汰だ。」

風羅

「槍汰の本当の名字は「山口」だけど、もう私と義兄弟の関係を結んだから、「川口」って名乗ってるんだよ!!」

風司

「ちなみに、剣汰も最兄も同様だ。」

槍汰

「だけど、実はまだ四代目三剣士を結成してはいない。」

…春音と春野、どちらを入れるか、決めかねているところだ。」

風羅

「え？春音じゃないの？」

槍汰

「伝統に倣えば春音なんだが、春音はまだ精神が幼すぎる。」

そして春野は、母さんのラルクの力をほとんど使いこなしているからな…」

それに、まだこの世界で大きな戦いは起こってないから…」

風羅

「なるほど…」

高史

「ま、悩むだけ悩んどけ。」

風司

「決められるのは、お前だけなんだからな。」

槍汰

「…ああ。」

風羅

「さて、追加キャラの紹介は以上です！」

風司

「ふっふっふ、感想で大アバレしてやるぜ!!」

楓

「やるぜー」

高史

「…今度はあんたが全員にシバかれる番だ。(ボソッ)」

春美

「一緒に感想やろうね春花」

春花

「うん！」

雲夜

「雷斗ー！今会いに行くよー！！」

槍汰

「とにかく、父さんの代わりにしっかりと果たさないと。

次回からは、俺と風羅がメイン司会者となる。」

風羅

「世代交代だよー！！」

高史

「まあ多文また出るだろうがな、俺。」

春花

「私だって！！」

風羅

「それでは、今回の雑談劇場はここまで！

次回をお楽しみに！！」

…あ、そういや途中から全くしゃべってないじゃん、俺。

全員

「今更！？」

### 第十三回（後書き）

では前回同様、風司、楓、春美、最斗、雲夜、槍汰について軽く紹介しましょう。

かわくち ふうじ  
川口風司

年齢 63

武器 剣の付いた火縄銃

高史と浩司の父で、「銃火器使いの剣士」の名を持つ銃の達人。性格は高史と全く同じ。すなわち変態。右目を失明しており、眼帯をしている。

かわくち かえで  
川口楓

年齢 57

武器 腕輪から放つ炎・氷・風の魔法

高史と浩司の母。

天然な性格で、風司とはベッタベタのバカップル。しかも百合好きの変態であるため、高史が変態になったのは必然と言える。

さくらい はるみ  
桜井春美

年齢 60

武器 刃の付いた弓

春日・春花の母。

春花や春日同様、活発な性格。

手から稲妻を発生させることができ、それを矢にして放つ。

かわくち さいと  
川口最斗

年齢 69

武器 斬馬刀

雷斗・劍汰の父で、二代目三劍士筆頭。

「二代目最強の劍士」の名を持ち、自身の身の丈ほどもある斬馬刀を軽々と振るう。

無口で厳格な性格。

なお、以上の4人は高齢ながら全く老けておらず、実力も全く衰えていない。

かわくち くもよ  
川口雲夜

年齢 39

武器 振袖に仕込まれた鉄爪

高史・浩司の姉で、雷斗と付き合っている。

武器の性質上、常に振袖のある服を着ている。  
常にハイテンションな性格で、高史や雷斗を見るとすかさず抱きつく癖がある。

また、何故か蜘蛛と会話でき、高史を蜘蛛嫌いにした張本人。

かわくち そうた  
川口槍汰

年齢 12

武器 劍汰の槍「豪竜胆」を受け継ぐ予定

劍汰の息子で、四代目三劍士筆頭。

性格は劍汰とほぼ同じ。

劍汰を心から尊敬し、劍汰のような「最強の劍士」となることを目標としている。

劍汰に対しては素直だが、それ以外にはあまり素直じゃない。

カイザの日なので、第913回w(前書き)

今日は913カイザフェスティバル&カーニバル!!

カイザの日なので、第913回w

「スタンディングバイ」

高史

「変身！…！」

「コンプリート」

（高史、カイザに変身。）

カイザ

「俺を好きにならない人間は邪魔なんだよ…！」

春花

「…いきなり変身して何言ってるのコイツ？」

雷斗

「とりあえず普通じゃないのは確かだが…！」

浩司

「高史が普通じゃないのはいつものことです。」

カイザ

「カーイーザ！カーイーザ！カーイーザ！

カーイーザ！カーイーザ！カーイーザ！

カーイーザ！カーイーザ！カーイーザ！」

浩司

「…いつも以上に普通じゃないですね、これ。」

春日

「風羅ちゃん、なんであんなってるかわかる？」

風羅カイザ（以下Kカイザ）

「だって今日は913の日だもん!!」

春日

「こつちも変身してた!？」

雷斗

「親子揃って大暴走してるな…」

作者カイザ（以下Sカイザ）

「まあ、913の日だからな。」

春花

「作者まで!？」

浩司

「作者はカイザが一番好きですから…」

高史カイザ（以下Tカイザ）

「カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

Kカイザ

「カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

Sカイザ

「カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

Tカイザ・Kカイザ・Sカイザ

「カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!

カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

雷斗

「うざっ!?!」

浩司

「この暴走は今日いっぱい収まりませんね…」

春花・春日

「ええ…」

Tカイザ

「俺のイニシャルである「T」はカイザの「か」とキーボードが同じ位置!!」

「なんとという運命!!」

Kカイザ

「私はカイザと同じ「か」が名前の頭文字!!」

「なんとという運命!!」

Sカイザ

「俺もイニシャル「T」だし!!」

「なんとという運命!!」

Tカイザ・Kカイザ

「でもお前、ファイズである乾巧と同じ「タクミ」だから、カイザの敵じゃん。」

Sカイザ

「…しまったああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

Tカイザ・Kカイザ・Sカイザ

「でもそれでもカイザが大好きだああああああああああああああああああああああ!!」

春花・春日

「…帰ろっか。」

雷斗

「ああ。」

浩司

「そうですね。」

Tカイザ

「ディケイドで中の人の声やってくれた!!!」

Kカイザ

「超リアルなフィギュア出た!!!」

Sカイザ

「まさかの中の人フィギュアも出た!!!」

Tカイザ・Kカイザ・Sカイザ

「カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!

カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!

カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

Tカイザ

「そして…二次ではあるが…」

「アウエイクニング」

TカイザBF

「カイザのブラスタも、アクセルも出た!!!」

TカイザBF・Kカイザ・Sカイザ

「カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!

カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!

カーイーザ!カーイーザ!カーイーザ!」

TカイザBF

「最後にもう一丁!ハイ!!!」



## カイザの日なので、第913回w（後書き）

ということ、今日は9月13日、すなわち「<sup>カイザ</sup>913の日」なのでした。

今年で8周年！10周年まであと2年！！

今であれだから、10周年になったら、中の人ほど狂喜乱舞することやら・・・

カーイーザ！カーイーザ！カーイーザ！  
カーイーザ！カーイーザ！カーイーザ！  
カーイーザ！カーイーザ！カーイーザ！

## 第十四回という名のお知らせ

風羅

「こんにちは！川口風羅です！！」

槍汰

「川口槍汰だ。」

そしてどうも、ちゃっかり皆勤賞の作者です。

風羅

「さてさて、今回はサブタイ通り、お知らせがあります！！」

この「三剣士の雑談劇場」は、読者からのゲストリクエストで成り立っているわけなのですが、この度、新しいリクエストを募集することになりました。

風羅

「その名も、「シチュエーションリクエスト」です！！」

槍汰

「このリクエストは、「もしもあのキャラがこんな性格だったら」とか「このキャラにこんなことをしてほしい」などの「お題」を募集し、それに沿って作者が小話を書く、というものだ。

念のため言っておくが、「キャラ」とは俺たちのことだからな。

一例を用意したので、参考にしてほしい。」

お題「もしも風羅がツンデレだったら」

高史

「かゝざら〜」

風羅

「近寄んな変態!」

ドゴツ!!

高史

「ガハツ!」

いつものように風羅に抱きつこうとするが、あえなく風羅の蹴りが腹にクリーンヒットし、悶える高史。

高史

「フツ…俺に似ていい蹴りしてるな…」

風羅

「うっさいバカ!

別にあんたの真似なんかしてないわよ!」

高史

「真似とは言ってないが…」

というか真似とんのかい。」

風羅

「うっさい黙れ!!」

叫ぶとともに、突っ伏す高史にもう一発蹴りを入れる風羅。

高史

「ぐふっ!」?

追撃とは、やるな風羅…なかなか効いたぜ。」

風羅

「黙れつての!!」

何?あんたDMなの!?

高史

「断じて違う!!」

どっちかつつーとSだ!!」

風羅

「死ねこの変態!!」

風羅の渾身の一撃が、高史に炸裂した。

高史

「こはっ!!??」

食らった勢いで床を転がり、仰向けになって止まると、高史はそのまま動かなくなった。

風羅

「ったく、いちいち一言余計なんだから…!!」

風羅は腕を組みながら高史を睨む。

高史は一向に動く素振りを見せない。

風羅

「…いつまで寝っ転がってるつもりなの?」

風羅が呆れながら問いかけるが、高史は動かない。

風羅

「…ちよっと、返事くらいしなさいよ…!!」

風羅はもう一発蹴りを入れようと高史に近づくが、様子がおかしいことに気付く。

風羅

「嘘…でしょ…」

風羅は膝をつき、高史の体を揺する。

風羅

「ねえ…変な冗談やめてよ…！」

「ねえ…ねえ…！」

風羅は必死になって高史を揺するが、それでも高史の眼は開かなかった。

風羅

「嫌…死なないで…お母さん…！」

高史

「なら生きよう。」

その台詞と共に高史は突然目覚め、風羅を抱き寄せた。

風羅

「きゃあっ!?!」

高史

「まさかここまでうまく引つかかるとはなあ…」

「あんなんで死んでたら今頃生きてないから。」

「第一、風羅を残して死ぬわけないだろ。」

言いながら、高史は風羅の頭を撫でる。

高史

「…ごめん、怖がらせて。」

風羅

「…バカアツ!!!」

風羅は高史から離れると、高史の胸に心臓マッサージを一発食らわせた。

高史

「…ほっ!？」

そして風羅は走って自分の部屋に行き、強くドアを閉めた。

高史

「…全く、これだからツンデレは…」

高史は立ち上がり、軽く咳き込む。

高史

「…あとで土下座するか。」

そのころ風羅は、ベッドの上で体育座りをして、足に顔を埋めていた。

風羅

「…バカ…バカバカバカ…！  
本っ当にあいつつてやつは…！  
…でも…」

風羅は、自分の足を強く抱きしめると、

風羅

「…良かったあ…」

そう、静かに呟いた。

槍汰

「とまあ、こんな感じになる。」

高史

「風羅可愛いよ風羅あああああああああああああ…！！！」

風羅

「ひゃあああああああ！？」

(高史、突然現れて風羅に抱きつく。)

高史

「風羅になら殺されても構わない！！！」

風羅

「そんなこと絶対にしないよ！！！」

私は永遠にお母さん大好きだもん！！！」

高史

「風羅あああああああああ！！」

風羅

「お母さああああああああん！！！」

槍汰

「ちよつと黙れ馬鹿親子。」

風羅・高史

「すみません。」

槍汰

「この「シチュエーションリクエスト」は、ユーザーはもちろん、ユーザーじゃない人からも応募を受け付ける。

作者と今まで関わりの無かった人でもOKだ。

また、リクエストの回数・個数に制限はないので、一人何回でも、何個でもリクエストを受け付ける。

リクエストは余程の無茶ぶりでない限りは必ず実行するので、ぜひ応募してほしい。」

風羅

「なお、ゲストリクエストも引き続き募集しています！」

こちらは「小説家になろう」で連載小説を書いている人限定になります。作者と初対面の方からのリクエストも受け付けています！

リクエストする際には、ゲスト希望のキャラと作品名、そして私たちの中から司会をしてほしいキャラを三人選んで書いてください！」

高史

「こつちのリクエストもできるかぎり必ず実行するが、最低一ヶ月は待たされることを覚悟しといたほうがいいかも。」

それでは、今回はこれにて。

槍汰・風羅・高史

「リクエスト、お待ちしています！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9617m/>

---

三剣士の雑談劇場

2011年11月8日03時05分発行